

発 刊 の こ と ば



自然に親しむことの少ない私達にとって、世界の珍しい動物たちの生態を観察して自然科学を探究したり、可愛らしい動物に接して心のやすらぎをもつことは、ともすれば無味乾燥な日常生活にうるおいと、明日への勤労の意欲を与えてくれるものです。

京都市動物園では、さきに類人猿舎を建設するなど、いろいろ施設の充実をはかり、動物園と市民のつながりを一層深めてまいりましたが、更に今回は、内

外の爬虫類・両生類などを展示する爬虫類館（仮称）の工事を行なうこととし、本年秋には工事に着手、明年10月ごろには完成して、子供たちの期待にこたえたいと考えております。

このたび、動物園で「動物園だより」を発刊することとなり、今後どんどん新しい動物園のニュースを市民に紹介したいと思っております。

ここに動物園「だより」発刊のご挨拶申し上げますとともに、一層市政の運営にご協力下さいますようお願い申し上げます。

昭和47年8月1日

京都市長 船橋求乙

動物園週間によせて

京都市動物園長 林 田 礼 俣



明治の京都人がなしとげた偉業は、疎水の大工事をはじめとして数々ありますが、その一つに動物園の設立をあげることができました。

私たち京都市民は、幼い頃よりこの動物園と共に育ってきました。いわば動物園は市民の心のふる里であり、植物園と共に都市のもつ「オアシス」ともいえます。

つれづれに園内の小道を散策するとき、とうとうとふき出る噴水の前に立つとき、すべてはなじみ深い情緒が一ぱいであり、両親や先生につれられて楽しく学んだ子供の頃の記憶と面影をそこそこに見出して、限らない郷愁と愛着を思い出さずにはられません。

この動物園は、明治33年5月10日京都御所で行われた皇太子のご成婚を記念する事業として、6千人に及ぶ市民の寄付と市費を合せ3万円で、洛東岡崎で開かれた第4回内閣勸業博覧会の跡地に明治36年4月1日に開園いたしました。

その後幾星霜、園内中央には苔むす岩を中心に噴水があり、大正天皇が行幸された際、二条離宮に芽生えた尺余の稚松、赤松・黒松の二本を一株として植えられた記念樹が、今は根元より13本の幹を分岐し、生長繁茂して69年の歴史を重ねてまいりました。

開園当初動物の数は、ラクダ・タンチョウなど12種25点にすぎませんでしたが、その年の入園者は36万人を数え、日本で二番目にできた動物園として、山紫水明の環境にめぐまれ好評を博したといわれます。

その後年々動物数も増え、設備も充実しましたが、戦争は動物園にとって壊滅的な打撃を与えることになりました。戦争の終結と共に、いも畑の中から動物園はいち早く復旧し、市民の協力と、先輩の苦心により、見事に再建することができました。

現在、収容動物数254種1,531点で、動物舎は類人猿舎をはじめ新しい企画をとり入れ、園内緑化の確立と共に、ユニークな動物舎と周囲の環境に恵まれて京都市動物園ならではの雰囲気をかもしだしています。

さて、日本動物園水族館協会では、毎年8月1日より1週間を動物園水族館週間と定め、こゝへ訪れる方々に動物園を正しく理解していただくよう、いろいろ

な行事や啓蒙活動を行なっています。

動物園では世界各地にすむ珍しい動物を沢山飼っていますが、これは単なる見せ物として飼っているわけではありません。

動物園は博物館的な要素と公園的な要素とを併せもつ施設ですが、具体的には次のような目的をもって仕事をしています。

1. 野生動物を飼育展示して、自然科学を学んでいただくところ。
2. 郷土の動物や、珍しい動物、かわいい動物に接して、誰もが心の安らぎをもちながら楽しむでもらうところ。
3. 機械文明の発達に伴ない、失われがちな野生動物の保護活動をするところ。
4. 動物の生態や、繁殖を計るなどの専門的な研究をするところ。

本来なら動物たちは自然でのびのびと生活してくれればよいのですが、私たちがここにいる動物に、彼等から自然に住む重大な権利を奪ってまで飼育していることは以上のような目的があるからです。このことをよく理解していただき、暖かい気持で動物をかわいがって下さい。私どもも細心の注意をはらって彼等に飼育下での科学的な自由を与えてやるよう努力しております。

20世紀後半から21世紀にかけての人類最大の課題は都市問題であり、私たち動物園の分野においてもこのことを切り離して考えることはできません。それはこのすさまじい機械文明、都市化現象の中でいわゆる、都市動物園は新たな役割を担うことになりました。即ち自然と隔絶されがちな都会人と自然を結ぶかけ橋としての動物園、人間回復への足がかりとしての動物園の機能を見出すことができます。これは手前味噌と言えない必要性を今日ほど感じることはありません。また、従来やゝもすれば動物園は野生動物を捕獲することによって、むしろ自然保護の逆の立場にあったともいえますが、このようなことを改めることは勿論、進んでその専門的な知識を活用し、科学的な保護活動を行なうことも、今後益々重要となってきました。

私たち郷土の先覚者がつくってくれたこの動物園を高度に活用し、もっともっと充実させて、人と動物のつながり、動物園と市民のつながりを一層深めてゆきたいと思います。

マックはウチ弁慶 良妻型のミッチー

日本で初めて生まれたゴリラのこども「マック」もはや1年9カ月を経過し、まもなく2度目の誕生日を迎えようとしています。体重も生まれた当時の6倍近くになり、順調に成長しています。この「マック」のガールフレンドとして、去る1月19日にオランダよりやって来たのが「ミッチー」で、暫らくは別のオリに入れて健康診断したり、「マック」と顔つなぎしたりしました。健康に異状がなかったため、間もなく毎日30分間ずつ一緒に遊ばせ、だんだん馴れるにしたがって時間を長くして、5月中旬頃から同じオリに入れて終日一緒に暮らすようにしました。この間の状況や性格など観察したことを、お知らせします。

「ミッチー」が到着した当時は酷暑期で、カゼを引いたりしては大変と、温度や食物にも気をつけ何回も診察や検査を行ないました。異状はありませんでしたが、体はかなりやせて居り、腹は異様に大きく、目はギョロギョロして、お世辞にもスタイルが良いとは言えませんでした。体重は「マック」よりかなり軽いですが、歯は乳歯が全部生えそろって居り、生まれた時期は同じ頃かと推定しました。



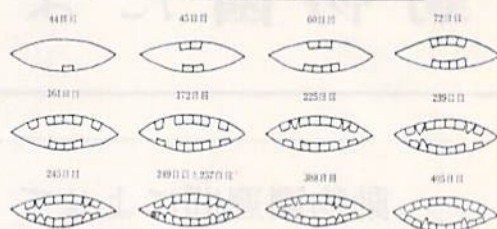
左：マック・右：ミッチー

はじめて同居させたとき、お互いに暫らく様子をうかがっていましたが、間もなく体の大きい「マック」が「ミッチー」を、つついたり足で蹴ったりしました。こういったいたずらも日毎に手荒となって、そのうちにキックボクシングでもしているような乱暴振りで、「ミッチー」を困らせ、辛抱強い彼女もしまいには、悲鳴をあげるぐらいでした。

「マック」は「ミッチー」に対し暴君で、これではとても一緒にしておくわけにはいかないと、心配していたのであります。然し何カ月か経過する間にだんだんと仲良くなり、今では昼夜一緒にしておいても、以前のような乱暴は少しも見られません。若しあったとしても、彼女も負けていないようになり、追い廻わしたり、要領よく逃げたりして遊んで居り、その光景は人気者になっています。

「マック」は小さい時から人見知りをよくして、屋外に連れ出すと全身緊張させ身動きひとつしません。彼は今でも同じで、ウチ弁慶です。その点「ミッチー」は少々神経が太いのか、知らない人でもすぐ馴れ

歯が生えた順(乳歯)



て抱かれ、屋外に出ても変わった様子もありません。

「マック」は暴君かも知れませんが、「ミッチー」の忍耐強さは「マック」の母親「ベベ」によく似て居り、将来良いお嫁さんになるものと楽しみにしています。

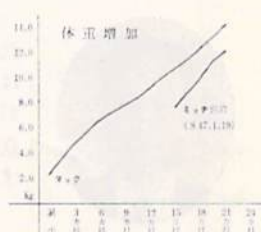
ここで「マック」の

誕生からの成長記録について若干ふれてみます。生まれたのは、昭和45年10月29日午後2時30分で、類人猿舎の野外運動場です。妊娠期間は245日でした。

母親の「ベベ」は当時

12才で、分娩した時、初めてのお産のためかビックリのあまり興奮して母親らしく胸に抱いて、お乳を飲ませようとはしませんでしたので思いきって親から離して人手で育てることにしました。当時のことについては、新聞紙上やテレビなどで再々報道されましたのでここでは割愛して、次に発育状況を観察した記録の一部を掲載します。

(W生)



マック Lowland gorilla

出生時	<ul style="list-style-type: none"> ●体重 2.370g ●頭胴 30cm 頭囲 30cm 胸囲 30cm ●胎盤 600g (臍帯を含む) ●目は見え、耳も聞こえない。 ●毛は頭頂部に10mm位の長さのものが生えていたが、その他はうぶ毛であった。 ●腕の筋肉はよく発達し、特に把握力は非常に強かった。
生後	体力の発達
2日目	うつぶせにしておくと、仰むけになっていた。
12日目	自力で寝返り、動きまわる。明るい方に顔を向ける。
39日目	うつぶせにしておくと、両手でつばって胸を浮かす。
52日目	背中毛が長く黒くなってきた。
60日目	目の前に指を近づけると、瞬く。
82日目	仰むけからうつぶせになる。
92日目	四つ足で5～6秒立つ。
105日目	育児箱のふちに手をかけて立ち上る。
207日目	手をすべらせて走る。
310日目	約1.5mをゆっくり上手に歩く。

ベニロフラミンゴ の繁殖

京都市動物園では、6月18日にベニロフラミンゴの雛が1羽孵化しました。ベニロフラミンゴは、一昨年より毎年孵化するようになったが、元気に雛が育ったのは、昨年はじめてです。そしてこれが日本の動物園において、ベニロフラミンゴの繁殖に成功した最初のものとなりました。

ベニロフラミンゴは、チリーフラミンゴと共に昭和40年3月に入園して以来、現在の収容場にいます。入園した年より営巣行動(嘴で泥を積み上げて円筒形の巣を作る動作)は見られたが、完全な巣はできませんでした。

昭和42年5月にはフラミンゴ収容場の大きな池の中に、径2.7mの島を2個作り、営巣用の土を多量に入れ、生息地と同様な環境を作った。すると、待ちかねたように営巣をはじめ(5.18)、1週間たらずで巣を4個作った(5.23)。しかし、産卵はしなかった。

昭和44年6月には、初めて産卵をみた。1番各1卵(6.2、6.4、6.8、6.14)計4卵産卵して、いずれも親に抱卵させたが、4卵ともふ化しなかった(破卵又は腐敗)。

昭和45年には、5～6月に4番が各1卵、計4卵産卵した(5.26、6.8、6.8、6.12)。抱卵期間が丁度日本では、梅雨にあたり雨のため抱卵不十分となったり、巢内に雨水がたまり卵が腐敗することを恐れ、卵は産卵直後取り上げ孵卵機に入れて孵化させることにした。その代り親には、ガチョウ卵を擬卵として抱かせた。しかし、4卵のうち3卵まで無精だった。最後に産卵した分(6.12)は、親に抱卵させていたが、検卵では無精のように思われたので取り上げた。しかし、念のために孵卵機に入れておいた(6.20)。この卵が幸にも7月8日の朝には、卵の中より雛が卵殻を破りはじめている(はしうち)のを発見したが、ひなが少し弱いのか、なかなか殻より出られないので、出血しないよう、乾きすぎないように注意しながら、4回にわたり殻を少しずつ破ってやり、やっと12時間後にひなを孵化させた(孵化日数:26日)。この時は、非常にうれしかったものです。

さて孵化したものの雛の餌付けに何を与えるべきかでゆきどまった。というのはフラミンゴの餌は第1表のような混合餌を、水にとかしドロドロの状態と与えているので、ひなも同じものでよいのか、又、どうして与えればよいのかと考えた結果、現在与えている餌から塩とムキ栗を除き、その代り脱脂粉乳を追加し、全て粉碎してスポイトにて与えたが、上手く食さず、いかにも不自然な与え方なので、竹で親の嘴に似せたさじ状の人工嘴をつくり流し込んだ。2時間おきに与えた。しかし、もっと動物質が必要と考えて、卵黄のうらごしとアミとチリメンジャコを増量して与えた。更に血液性のものを親は与えると聞き、アヒル1羽犠牲

にして、その血液をも餌の中に加えたが、ひなはその甲斐もなく、4日目にはへい死してしまった。

昭和46年には、5月下旬(28、30)に2卵産卵した。45年と同様、産卵後直ちに取り上げ孵卵機に入れ、親には擬卵を抱かせた。そして前回に餌付けを失敗しているので、ふ化寸前に卵を親に返し、育雛は親にまかせることにした。この年も又、雛は自力で孵化できず、助力が必要であった。少しずつ様子を見ながら殻をやぶり、はしうち(6.25)から24時間後、未だ殻をつけた状態で親に返した。翌朝(6.27)親の翼の下から頭を出して餌をもらっているのを見て孵化したことを確認した。孵化日数は28日だった。孵化直後の雛は、全身白色の羽毛に包まれ、脚と嘴は赤く、嘴は親のように曲っていない。ひなは親が一旦食したものを口うつしに与えられて順調に育った。雌雄ともよく雛の世話をやき、雛に給餌した。雄の方が熱心だった。擬卵も雌雄交代で自分の卵を返してもらうまでよくあたためた。

今年も5月10日、21日、23日と3番が、3個産卵し昨年と同様の方式で雛を孵化させました。孵化したのは5月21日産卵分で、孵化日数は28日でした。ひなは現在では、白い綿羽から灰色の綿羽に変わり、嘴もわずかに曲ってきた。身体も随分大きくなったのに、未だに親より口うつしに餌をもらっているのが見られます。なお、昨年生まれの方は、身体はすでに雄と同大となり羽毛も赤くなったが、少し黒ずんでみえ、脚に未だ黒い部分が残る見分かります。



△生後5日目 巣上に立ち上ったひな



△生後42日目 親より餌をもらっているひな

第1表 フラミンゴの飼料

	朝	夕
チ ャ ッ ク ・ フ ード	1,000g	2,000g
ム キ ア ヲ	300	300
青 の り	50	50
エ ビ	100	150
チ リ メ ン ジ ャ コ	160	160
人 参	600	600
青 菜	400	400
ド ジ ョ ウ	1,000	—
塩	620	620
ルーサン・ミール	50	50
エ ー フィード	40	60

(25羽分)

動物豆知識

自割と再生

A. T

トカゲのしっぽがちぎれ、ちぎれた方のしっぽが、しばらくの間、びんびん飛び跳ねるのを見たことのある人は多いと思いますが、その理由の重大さを考える人は、少ないようです。

シマヘビはトカゲを好んで食べますが、逃げ足の速いトカゲは危険が迫ると、いち早くとん走します。いくら逃げてもシマヘビの追跡をかわせないとなると、こんどは、観念したように、しっぽだけを静かに揺り動かしながら、体は石のようにじっとして動かなくなります。この動作はトカゲの奥の手ならぬ奥の尾の手段なのでしょう。当然、シマヘビは動くしっぽの部分にねらいをつけることになり、トカゲは、自分のしっぽを咬まれるや否や、そのしっぽを振り切って、最後の逃走を企てるわけです。ちぎれたしっぽは、しばらくの間、踊るように動き廻るので、シマヘビが気をとられている瞬間を巧みに利用して、危険を逃れるわけです。このように自分からしっぽを切り離すことを「自割」といい、ヤモリのしっぽも同様によくちぎれます。

ドブネズミやシマリス・ヤマネなどのしっぽに

も、これに似たような危険救済機能を秘めています。しっぽを踏んだり、物陰にもぐり込んで、しっぽだけを出しているところを捕えて引き摺り出そうとすると、しっぽの皮が根元から、つるりと脱けてしまいます。あつという間の出来事なので、びっくりしている間に、これらの動物は逃げ去ります。皮のむけたしっぽは、それ程出血もせず、乾燥して、根元から落ちてしまいます。トカゲのように、再び生えてはきませんが、命を永らえることが出来ます。

ノウサギの皮にもそれに似た効用があります。山道で運悪く、ハイキングの人達に捕えられたノウサギの子供は、まあ、カワイイなどと、女の子に抱き上げられたりする際、扱い方が悪いと、背中や皮であらうと、足の皮であらうと、捕えた部分の皮がペロリと剥けて中身が露出してしまいます。驚いた女の子の悲鳴を尻目に、さっと繁みの中に走り去り、まさに脱兎のごとき妙技を見せてくれます。

この剥げた部分は意外に早く皮膚に被われ、間もなく元通りに修復されるようです。

人間の手足が切断されると、もう、元には戻りませんが、トカゲのしっぽのように元に戻る再生の妙薬がないものだろうか、と、主を失くしたトカゲのしっぽが、踊りを踊っているのを見る時、寸前に起ったトカゲの身の危険も考えずに、いつもそう思うのです。

できごと

* 5月17日

「ヨウチエン」という名前のメスシカが死にました。このシカは昭和25年4月22日に市内の浄福寺保育園から動物園へきたもので、飼育期間は22年1カ月でした。昨年からは老令による白内障で両眼とも全く見えなくなり、群れから離れて飼っていました。昭和37年6月4日には難産で帝王切開手術をしたことがありました。

* 5月22日

ゴリラの子ども「マック」の母親「ベベ」が、東京・上野動物園に向けて出発しました。上野のオスゴリラ「ブルブル」とうまく交配ができれば「マック」の弟か妹の誕生が期待できます。

* 6月11日

恒例の動物園写生大会が開かれました。参加総数は1793点。審査の結果次の方々が金賞を受賞され、日本動物園水族館協会主催の全国児童動物画コンクールに出品されます。1年 なりたのお(有済)・まつもとみのる(有済) 2年 まつうらのぶき(室町)・渡辺三記(教業) 3年 満徳伸幸(鞍馬)・多賀千代子(教業) 4年 木本貴也(有済)・川島秀則(教業) 5年 下里知子(有済)・浜岡敦子(中立) 6年 田中宏輔(有済)

・中村奈美(有済) (敬称略)

* 6月18日

ベニイロフラミンゴが1羽孵化しました。昨年に続き2回目です。くわしくは本紙2ページをみてください。

* 6月23日

アツカが1頭生まれました。3日後の6月26日につかまえて調べたところ、オスで7.9kgありました。

* 6月26日

トラのメスがきました。いままで飼っていた2頭は昨年の暮と今年の初めに相ついで死んだので、その補充に入れたものです。このトラは昨年6月8日に九州の到津動物園で生まれたものです。近日中にオスも入る予定です。

* 7月16日

ホオジロカンムリヅルが7月11日、13日について3個目の卵を産み抱卵をはじめました。約30日後にはヒナが誕生する予定です。

* 7月20日

園内の黒松に営巣していたアメリカシロヒトリは卵を2個地面に落し、孵化の見込みがなくなりました。

■ 第2号の発行は、10月8日(博物館週間)の予定です ■